

こども まんなか アクション

— ファクトブック —

2024年第2版
令和6（2024）年12月

こどもまんなか
こども家庭庁

CONTENTS

第1章	こども・子育てにやさしい社会づくりの現状	2
出産や子育てにやさしい社会（「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」より）		
こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面		
（「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023」より）		
こども未来戦略〔令和5（2023）年12月22日閣議決定〕		
こども大綱〔令和5（2023）年12月22日閣議決定〕		
第2章	こども家庭庁が取り組む「こどもまんなかアクション」	6
こどもまんなかアクション		
こどもまんなか応援サポーター		
こどもまんなかアクションの様々な取組		
第3章	こどもまんなかアクションの事例	10
居場所づくり・こども食堂		
インクルーシブ社会		
こども・子育て応援		
こども・若者主体のアクション		
体験型等こどもの育ち応援		
共働き・共育て		
こどもまんなか応援サポーターとの連携		

本資料に関する問い合わせ先

こども家庭庁こどもまんなかアクション推進室
e-mail：kodomokatei-action@cfa.go.jp

第1章

こども・子育てに やさしい社会づくりの 現状

Contents

出産や子育てにやさしい社会 （「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」より）	3
こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面 （「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023」より）	4
こども未来戦略〔令和5（2023）年12月22日閣議決定〕	5
こども大綱〔令和5（2023）年12月22日閣議決定〕	5



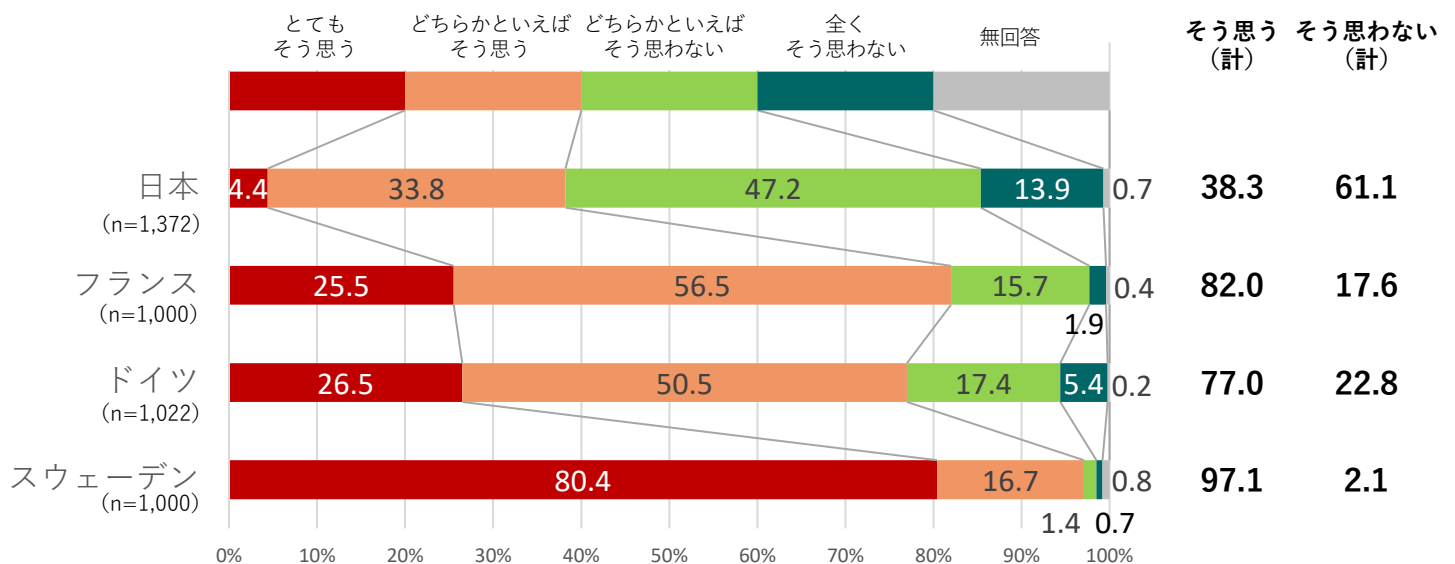
出産や子育てにやさしい社会

日本が出産や子育てにやさしい国と感じている人は少数派

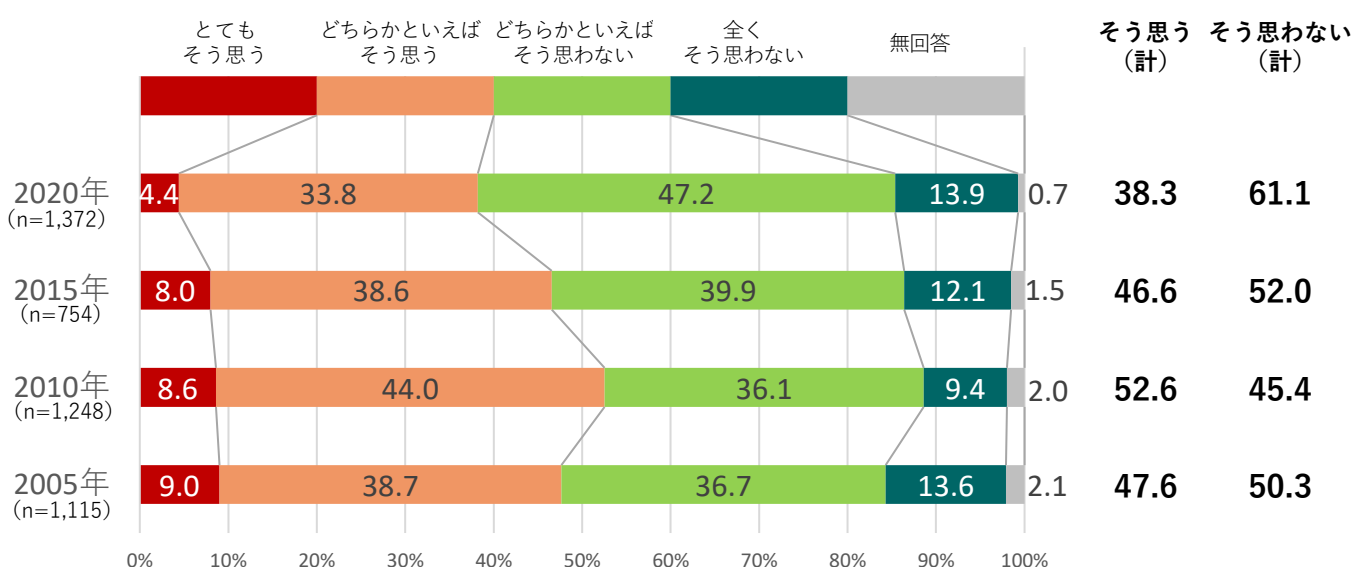
自国が子どもを生み育てやすい国か？——内閣府の「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」によると、日本、フランス、ドイツ、スウェーデンの4カ国の20～49歳の男女に質問した結果、日本では「とてもそう思う（4.4%）」と「どちらかといえばそう思う（33.8%）」を合計した「そう思う（計）」は38.3%で少数派であることがわかりました。これに対して、フランス、ドイツ、スウェーデンでは「そう思う（計）」は75%以上で、4人に3人以上を占める多数派であることがわかりました。また「とてもそう思う」と答えた人はフランス、ドイツで25%以上、スウェーデンでは80%以上に上りました。

また、日本について過去の調査結果を見ると、2010年に「そう思う（計）」と答えた人は52.6%で過半数を占めていました。しかしその後の10年間で大きく減少した一方、「そう思わない（計）」と答えた人が15ポイント以上も増加し、日本が子どもを生み育てやすい国ではないと思う人が増えていることがうかがえます。

子どもを生み育てやすい国だと思うか（4カ国比較、2020年）



子どもを生み育てやすい国だと思うか（日本）



* 出典 内閣府 子ども・子育て本部：令和2年度「少子化社会に関する国際意識調査」報告書（概要版）

https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf_g-index.html

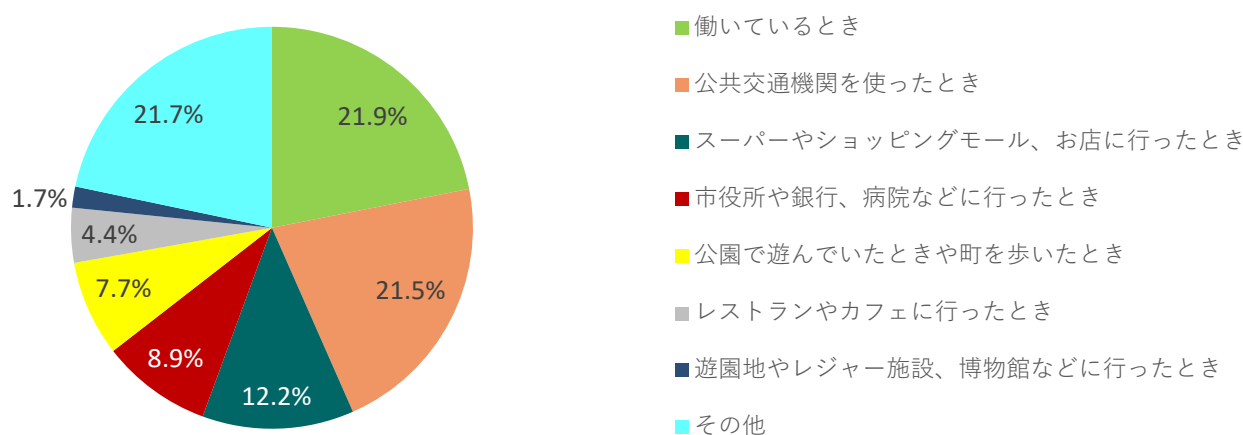
こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面

「働いているとき」や「公共交通の利用時」など様々な場面で感じている

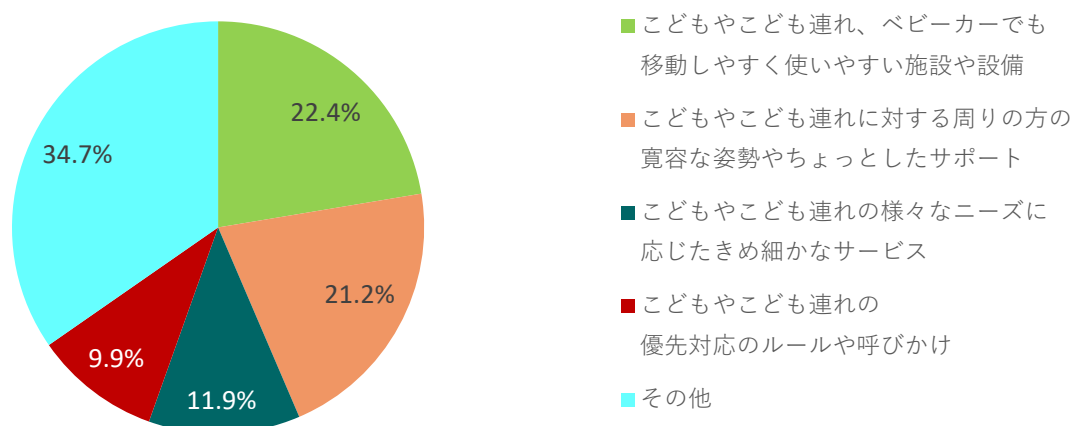
こどもと一緒にいるときに不便を感じたり、理解や配慮が欲しかった場面は？——こども家庭庁が令和5年に実施した「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査」には、4,000以上の回答が寄せられました。その結果、「働いているとき（21.9%）」、「公共交通機関を使ったとき（21.5%）」がともに20%を超え、「スーパーやショッピングモール、お店に行ったとき（12.2%）」、「市役所や銀行、病院などに行ったとき（8.9%）」が続きました。

また、「周りから欲しかった理解や配慮の内容」を見ると、「こどもやこども連れ、ベビーカーでも移動しやすく使いやすい施設や設備（22.4%）」と「こどもやこども連れに対する周りの方の寛容な姿勢やちょっとしたサポート（21.2%）」がそれぞれ20%を超える結果となりました。そして「その他」も30%以上に上り、周りから欲しい理解や配慮の内容が多様であることがわかります。

こどもと一緒にいるときに不便を感じたり、理解や配慮が欲しかった場面（全4,455件）



周りから欲しかった理解や配慮の内容（全4,215件）



* 出典 こども家庭庁：こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023
<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-mannaka>

次頁以降では、現在のこども・子育てにまつわる課題を解決するために、我が国が示した「こども未来戦略」と「こども大綱」についてご紹介します。

こども未来戦略 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]

Ⅱ. こども・子育て政策の強化：3つの基本理念

1. こども・子育て政策の課題
 - (1) 若い世代が結婚・子育ての将来願望を描けない
 - (2) 子育てがしづらい社会環境や子育てと両立しにくい職場環境がある
 - (3) 子育ての経済的・精神的負担感や子育て世帯の不公平感が存在する
2. 3つの基本理念
 - (1) 若い世代の所得を増やす
 - (2) **社会全体の構造・意識を変える**
 - (3) 全てのこども・子育て世帯を切れ目なく支援する

Ⅲ. 「加速化プラン」～今後3年間の集中的な取組～

1. 「加速化プラン」において実施する具体的な施策
 - (1) ライフステージを通じた子育てに係る経済的支援の強化や若い世代の所得向上に向けた取組
 - (2) 全てのこども・子育て世帯を対象とする支援の拡充
 - (3) 共働き・共育での推進
 - (4) **こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革**
2. 「加速化プラン」を支える安定的な財源の確保
3. こども・子育て予算倍増に向けた大枠

加速化プランの取組の中で生まれた「こどもまんなかアクション」

加速化プランの4つ目の施策「こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革」は、こども・子育て政策を実効あるものとするために、こどもや子育て中の方々が気兼ねなく様々な制度や支援メニューを利用できるよう、地域社会、企業など様々な場で、年齢、性別を問わず、全ての人がこどもや子育て中の方々を応援するといった社会全体の意識改革を進めることを目的としています。

そしてこの施策のひとつとして、令和5（2023）年5月に「こどもまんなかアクション」がスタートしました。こどもたちのために何がもっともよいことを常に考え、こどもたちが健やかで幸せに成長できる社会を実現するという「こどもまんなか」の趣旨に賛同する企業・個人・地方自治体などに「こどもまんなか応援サポーター」となってもらい、「今日からできること」を実践し、取組んだ内容を自らSNSなどで発信してもらっています。この「こどもまんなかアクション」の取組に加え、こども・子育てを応援する様々な取組事例の共有などにより、こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革を目指していきます。

こども大綱 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]

第4 こども施策を推進するために必要な事項

2. こども施策の共通の基盤となる取組
 - (5) **こども・若者、子育てにやさしい社会づくりのための意識改革**

「こども大綱（令和5年12月22日閣議決定）抜粋」

こどもや若者、子育て当事者が気兼ねなく様々な制度や支援メニューを利用できるよう、地域社会、企業など様々な場で、年齢、性別を問わず、全ての人がこどもや子育て中の方々を応援するといった社会全体の意識改革として「こどもまんなかアクション」を進めていきます。子育て当事者がこどもと一緒にいるときに感じた不便や周囲に求める理解や配慮に関する調査結果を踏まえ、国の施設や他の公共施設、民間施設におけるこどもや子育て家庭を優先して受け付ける取組やこども・子育てを応援する地域や企業の好事例の共有・横展開、公共交通機関等における妊産婦や乳幼児を連れた家庭に対する分かりやすい案内や妊産婦や乳幼児を連れた家庭への配慮に関する利用者の理解・協力の促進など、様々な取組を通じてこどもや子育て当事者を社会全体で支える気運を醸成していきます。

第2章

こども家庭庁が取り組む こどもまんなか アクション

Contents

こどもまんなかアクション	7
こどもまんなか応援サポーター	8
こどもまんなかアクションの様々な取組	9

※こどもまんなかアクションに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら



こどもまんなかアクション

こども・子育てにやさしい社会づくりを目指す「こどもまんなかアクション」

こどもまんなかアクションとは、こども未来戦略の加速化プラン「こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革」を目指す施策のひとつとして、全ての人がこどもや子育て中の方々を応援するといった社会全体の意識改革を進めることを目的として、取組が進められています。

「こどもまんなかアクション」の「こどもまんなか」の趣旨（右図参照）に賛同する「こどもまんなか応援サポーター」自らがアクションに取組み、その情報を発信いただくことに加えて、その内容をこども家庭庁としても公式LINEなどを通じて発信します。そしてこの活動を柱に全国で自治体主催の「リレーシンポジウム」を開催するほか、応援サポーターとの活動連携や意見交換、「授乳室、おむつ替えスペース、こどもファスト・トラック等の設置」や「ベビーカーが通りやすい通路の確保」等、公共の場でのこどもや子育て当事者のみなさまへの思いやりや配慮がなされるような取組をサポーターのみなさまと一緒に進めております。



これまでの「こどもまんなかアクション」の歩み

現在の「こどもまんなかアクション」につながる取組のはじまりは、こども家庭庁が令和5（2023）年5月2日に「こどもまんなか応援サポーター」の取組の発表を行ったことでした。「こどもまんなか」に向けた自発的なアクションに取組み、その内容をSNS等で「#こどもまんなかやってみた」を付けて発信するよう企業や個人、自治体などに広く呼びかけました。その後、こどもまんなか応援サポーターの数は増加を続け、38道府県、304市区町村、2,066の団体・企業・個人が参加しています〔令和6（2024）年11月25日現在〕。

令和5（2023）年 5月	「こどもまんなか応援サポーター」取組スタート
7月	「こどもまんなかアクション」の本格始動
8月	「こどもまんなかアクション公式LINE」の開設
9月	「こどもまんなか応援サポーター」事例の発信開始
10月	「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウムを初開催（令和6年3月までに全国11ヵ所で実施）
11月	「秋のこどもまんなか月間」開始 「こどもや子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023」結果公表 「こどもまんなかアワード」発表 「こどもまんなか応援サポーター」とのアクション連携
令和6（2024）年 5月	「春のこどもまんなか月間」の実施 「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウムを15ヵ所程度順次開催予定（令和7年3月まで）

こどもまんなか応援サポーター

こどもまんなかアクションを広げる「こどもまんなか応援サポーター」

「こどもまんなか」の趣旨に賛同し、自身が考える「こどもまんなか」なアクションを自ら実行することと発信に取り組んでいただける個人、団体・企業、自治体等を、「こどもまんなか応援サポーター」と呼んでいます。

こどもまんなか応援サポーターに参加するために、申請や届出などの手続きは必要ありません。こどもまんなかの趣旨に賛同し、今日からできる身近な「こどもまんなか」なアクションを実行し、SNSで「#こどもまんなかやってみた」を付けて発信いただくだけで、こどもまんなか応援サポーターとなります。



「こどもまんなか応援サポーター」参加の流れ

- ① 「こどもまんなか」の趣旨に賛同する
- ② サポーター自身が考える「こどもまんなか」なアクションを実行する
こども・若者に意見を聴き尊重したうえで何ができるのか、その答えは様々で、正解はありません。それぞれにできる、こどもまんなかに向けたアクションをぜひお願いします。
- ③ ご自身・団体のアクションを発信したり、地域社会に広く参加を呼びかけたりする
SNS（X、Instagram等）やYouTube上でそれぞれのアクションを「#こどもまんなかやってみた」を付けて発信したり、ハッシュタグ付き投稿を「いいね」するなど、ご協力をお願いいたします。

こどもまんなかマーク

こどもまんなかマークは、個人、企業・団体、自治体等が、こどもまんなかアクションの趣旨への賛同の意思を表明するためのものです。令和5（2023）年6月に実施した国民の皆様からの一般投票により決定しました。こどもまんなか応援サポーターの方が実践するアクションを発信する際などに、使用することができます。

こども
まんなか

※こどもまんなかマークに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら



こどもまんなかマークは、文字に様々な色を使うことで、こどもの多様性や個性を表し、
多くの人の思いやアクションがあることを表現しています。

38道府県、304市区町村、2,066の団体・企業・個人がこどもまんなか応援サポーター参加。

※令和6年11月25日現在

こどもまんなかアクションの様々な取組

「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム

こどもや子育て世代にやさしい社会づくりを推進する取組が全国に広がるよう、自治体が主体となり、「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウムを開催します。

令和5（2023）年10月30日に和歌山県で行ったシンポジウムを皮切りに、令和5年度は神奈川県、岡山県奈義町、埼玉県、北九州市、北海道、愛媛県、福山市、大分県、福井県、栃木市の計11ヵ所で開催いたしました。

これまでのシンポジウムでは、こども家庭庁や自治体の担当者などによる基調講演のほか、こどもや子育て世代にやさしい社会づくりをテーマにしたパネルディスカッションや事例の発表などが行われてきました。

令和6（2024）年度は、山形県、前橋市など15ヵ所程度で順次開催しています。



こどもまんなか応援サポーターとの連携

こどもまんなか月間や夏休み期間など、応援サポーターと連携した取組を積極的に行っています。



「究極の映画館をつくろう！」VIVISTOP博多でのこどもたちのプロジェクトに参加しました。（福岡県福岡市）



デジタルテクノロジーを使ってチャレンジできる居場所「ハイラボ」のワークショップに職員が参加しました。（秋田県五城目町）

こどもまんなかアクション公式LINE

こどもまんなかアクションの公式LINEアカウントでは、子育てを応援する様々な情報をご覧いただけます。公式LINEアカウントの友だち登録者数は現在、5万人を超えています。



次章では、こどもまんなか応援サポーターが中心となって行われている「こどもまんなかアクション」の代表的な事例をご紹介します。

第 3 章

こどもまんなか アクション の事例

Contents

居場所づくり・こども食堂	11
インクルーシブ社会	13
こども・子育て応援	14
こども・若者主体のアクション	16
体験型等こどもの育ち応援	18
共働き・子育て	20
こどもまんなか応援サポーターとの連携	21

※こどもまんなかアクションに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら



こどもまんなかアクションの事例①

居場所づくり・こども食堂(1)

無人駅における放課後のこどもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」

(都留文科大学／山梨県都留市)

「ぷらっとはうす」は、都留文科大学、富士急行株式会社、都留市、早馬町自治会、生涯活躍のまち・つる推進協会が連携し、無人駅である谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点をめざして2018年12月に始まりました。名前には、電車の乗降場を意味するプラットフォームの「プラット」、またどんな人にも気軽に「ぷらっと」来てほしいという願いを込め、こどもの居場所づくりを小学生から高校生を対象に行っています。

現在は、毎週水曜日及び金曜日に宿題や勉強を見たり、トランプやUNOなどのカードゲームで遊んだりしており、一年に数回、七夕やクリスマスなどの季節のイベントも行っています。



ママのためのホッとタイム (NPO法人あっとわん発達支援ルームくまたん／愛知県春日井市)

ママのためのホッとタイムは、NPO法人あっとわんの児童発達支援事業（発達支援ルームくまたん）に通う、発達や育ちに心配があるこどもをもつ保護者向けの会です。

会では、こどもの生活に必要なと思われる情報を提供したり、保護者同士親睦を深めます。また学習会も行い、これまで「関わりの中で育つもの」、「からだと感覚のこと」、「こどもの見方、とらえ方」など、さまざまなテーマを法人スタッフである公認心理師が講師となり、実施してきました。

保護者が学習している間、こどもたちはプログラムに沿って療育を受けて過ごします。

発達や育ちを一緒に考え、子育てを支える会となればと思っています。



こどもまんなかアクションの事例②

居場所づくり・こども食堂(2)

リアルてらこや (らいむぎハウス／東京都羽村市)

コロナウイルス感染症による緊急事態宣言がつづく中、厳しい経済状況のご家庭が増え、教育格差問題も切実になりました。さらに行き場をなくした子どもたちを目の当たりにしたことにより、2021年7月からこの活動が始まりました。毎月第2土曜日の午前中に子どもたちの居場所づくり、学習支援と、こども食堂をメインに「リアルてらこや」を開室してきました。活動する中でお母さんが抱える悩みをゆっくり話せる場所をつくりたいと、「くれよんの会」を立ち上げ、月に2回場を設けています。活動も3年目を迎え、不登校の子どもたちが来やすいよう平日の「リアルてらこや」の開室も始めました。地域の方々との交流を通して、すべての子どもたちがありのままの自分でいられる居場所を目指しています。



子ども食堂サークル クロッカス (任意団体L.s.W／愛知県弥富市)

こどもや子育て世帯だけでなく、お年寄りや障がいを持つ方、海外にルーツを持つ人など、地域に住む人たちが”誰でも”気軽に参加と活動ができるこども食堂です。私たちは、「in the spring of life(青春の真っ只中)」というテーマを掲げ、こども食堂に関わった全員が青春を感じ、青春を思い出すことを目指し活動しています。そのため、「青春の喜び」という花言葉を持つ”クロッカス”をこども食堂の名前として使用しました。

毎月第3土曜日の11時00分から14時30分に開催しています。主な内容は、①会食形式での昼食、②ボードゲームやよさこいを通じた遊びと学び、③お悩み相談、④子ども・若者サポートクロッカスです。



© 2024 任意団体L.s.W

こどもまんなかアクションの事例③ インクルーシブ社会

ろう学校と連携した手話カフェ（地域デザインラボさいたま／埼玉県）

地域デザインラボさいたま（以下、ラボたま）の社内ビジネスコンテストにて聴覚障害をもった社員が、大人も子どもも、健常者も障がい者も共生できる社会を目指して、手話カフェ事業を提案。

金融経済教育等でりそなグループと接点のあった坂戸ろう学園、地域の障がい者支援事業者である（一社）Ciel（Green Peas Factory）さんにお声がけし、一緒に実施するに至った。

ろう学園の生徒たちはポスターを作成したり店員を主体的に務め、りそなグループの従業員も指差しメニューを作成したり手話通訳等を実施し、飲食運営についてはGreen Peas Factoryさんにご協力いただいた。

3日間のポップアップ開催の間に約600名の方にご来店いただき、今後、定期開催に向けて検討を進めている。



こども発達はうす まんまる (ジャックと豆の木園/愛媛県松山市)

合言葉は『こどもをまんやかに、まんまるにつなごう！』ジャックと豆の木園が運営する、児童発達支援事業・放課後等デイサービス・保育所等訪問を行う多機能型事業所です！発達に困り感のあるお子さんを対象に、作業療法士・言語聴覚士・公認心理師など様々な専門家の観点からこどもをサポートしています。

普段、クラスの中で控えめだったり、お友だちと遊ぶことが苦手だったりするこどもも、まんまるで少ない人数での集団だとおもちゃの貸し借りができた！異年齢とのかかわりもあり、お世話したり、されたりすることで上手に力加減ができた！感覚に働きかけ、離席せずに座れた！など。畑もあり野菜と一緒に育て、みんなで「まんまる」になれる温かい場所です。また、保護者の方々や園の先生方からの発達に関することや特性についての研修会や相談サポートも行っております。こどもをまんやかに、家庭・保育園・療育施設がつながり、連携してこどもの成長を見守り、支えてまいります！



こどもまんなかアクションの事例④ こども・子育て応援(1)

双子や三つ子などの多胎児支援

(江崎グリコ株式会社・一般社団法人日本多胎支援協会／全国)

双子や三つ子などを育てる多胎育児は「授乳回数の多さ」「睡眠不足」「過大な心身への負担」など過酷な実態が問題となっています。江崎グリコは育児負担の軽減に向け、2020年7月より、「多胎児をもつご家庭への支援」をミッションに掲げる一般社団法人 日本多胎支援協会のご協力のもと、多胎児家庭向けの「液体ミルク」購入補助支援やオンライン相談サービス等を実施してきました。本支援に対し、多くの多胎児家庭から反響をいただき、支援登録団体数は、当初の10団体から28団体に拡大しました。多胎児家庭・支援登録団体からの強い継続要望を受け、支援期間を 2025年7月14日まで延長することになりました。



かながわりトルベビーハンドブックの作成・普及 (NPO法人pena／神奈川県)

1500g未満で生まれた低出生体重児を対象とした母子健康手帳のサブブックを作成しました。一般の母子手帳には1000g未満の成長は記録できず、発達確認では「いいえ（できない）」に丸をつけることが多くあり、家族の気持ちが落ち込んでしまう場合があります。リトルベビーハンドブックは、体重は0gから、発達は「できた日付」を書き込みます。また、不安や孤独を感じやすい家族の気持ちに寄り添うため、先輩家族からのメッセージも掲載されています。2021年、penaから神奈川県知事へ作成を要望し、作成検討委員会を経て、2023年に、かながわりトルベビーハンドブックが完成しました。現在は、県主催の低出生体重児相談支援者研修での登壇や写真展の開催等の普及活動を行っています。今後も、必要とする当事者に届き活用いただけるよう、また、地域でのリトルベビー家族支援に繋がるよう、普及活動を続けていきます。

リトルベビー家族支援



いろんな子と、いろんなこと。



こどもまんなかアクションの事例⑤ こども・子育て応援(2)

やさしい日本語と外国語で学ぶ子育て支援講座（Pour Bébé／秋田県）

秋田県内に住む、妊娠中～乳幼児の子育て中の家族を対象とした、子育て支援講座を無料で開催しています。外国出身のかたも一緒に学べるよう、講師はやさしい日本語で話し、日本語が難しいかたには母語の通訳を準備して、イヤホンガイドを通した通訳を提供、また各講座のテキストは、日本語と母語の翻訳が見開きで見られるように作成しています。各講座では、宗教や文化を尊重しながら、日本での子育てに必要な情報提供を適切に行うとともに、不安や悩みが多い妊娠中～乳幼児期の家族が、「子育て」という共通の話題を通して違う国の家族と交流する時間を作り、孤独の解消に努めています。交流を通して多文化共生の意識の醸成や、やさしい日本語という概念を知りきっかけづくりにもなっています。また、すべての講座に父親の参加を可能としていることで、父親同士のつながりも生まれています。



VEGGIE for KIDS プロジェクト（株式会社seaside hub／兵庫県・全国）

兵庫県淡路島で発生する規格外野菜だけを地元農家の方達から直接仕入れ、日本全国へ販売するサービス、seaside grocery（シーサイドグロサリー）を展開する株式会社seaside hubが、規格外野菜の一部をこども食堂へ届け、規格外野菜を無駄にすること無くこども達の食事や食育へ繋げる【VEGGIE for KIDS プロジェクト】を展開しています。

弊社の規格外野菜を購入いただいた方からのチップを活用し、主に兵庫県内のこども食堂で規格外野菜を活用いただいたり、地域活性化を目的に活動されているPROJECT ONE様を通じて日本全国のこども食堂へ規格外野菜をお届けしています。



こどもまんなかアクションの事例⑥

こども・若者主体のアクション (1)

こども若者ボイス（長浜こどもまんなか／滋賀県長浜市）

長浜市では、こどもや若者の笑顔になる回数が今よりもたくさん増えている社会をめざして、「こども若者ボイス」を展開しています。

中学生トークでは、生徒たちが地域の魅力である竹生島の散策を体験。また、「長浜のことをもっと好きになって、地域を誇りに思い、愛着をもってもらうためには『どんなもの・どんなこと』があれば嬉しいですか？」をテーマにワークショップを開催し、意見やアイデアをイラストにして、生徒たちの思いが詰まったドリームマップを作りました。また、高校生トークでは「ここがヘンだよ！長浜市」などをテーマに、市に対し感じていることや提案したいことを自由に出していただき、大いに盛り上がりました。

これからも、こども若者の声を大切にしながら、笑顔あふれるまちをめざしていきます。



お福wapi（NPO法人キリンこども応援団／大阪府泉佐野市）

フリースクールキリンのとびらに通うこども達が運営する期間限定カフェ「お福wapi」。将来、料理人になりたい！お店をもちたい！という夢を持てるようになったこども達。そんなこども達が口にした「こども達でお店をやりたい！」という夢を実現。

私たちのカフェで私たちの幸せと温かい居場所をお福分けしたい！そんなコンセプトのもと、「お福分け」とスワヒリ語で「居場所」を表す「wapi」の2語を合わせて「お福wapi」という店名になりました。お福wapiでは、こども達が自ら調理・接客をするだけでなく、コンセプト作りやメニュー考案・試作、原価計算、仕入れ、広報、経営会議まで、職業体験以上の経営体験を得ることができました。

こども達自身の「やってみよう！」を実現したからこそ頑張れる夢への第一歩。

これからも、こども達が未来に踏み出せる居場所を創り続けていきたいと思います。



こどもまんなかアクションの事例⑦

こども・若者主体のアクション (2)

ユースセンターまあぶる (NPO法人manabo-de/岡山県真庭市)

ユースセンターまあぶるは、学校でも家庭でもない、10代のまちかどサードプレイスです。そして、ここは10代が自分たちで創っていく秘密基地。室内デザインも、改修・補修作業も全てこどもたちが行います。こどもたちは誰もが主役となり、意欲や創造性に働きかけをするスタッフ（ユースワーカー）とともに、充実した時間を過ごしています。ユースセンターまあぶるは、“やってみたい”、“知りたい”、“話したい”、“遊びたい”が詰まった空間で、未知なる自分を発見したり、新しい交友関係を築いたりすることができる場所です。放課後や休日に無料で利用できるのもうれしいポイント！

現在、中学生による駄菓子屋「ときドキプロジェクト」、中高生によるこども食堂「まあぶるkitchen」、高校生による小学生学習支援「真庭学習会」など、多数のプロジェクトが稼働しています。



ジュニアビレッジ (グローバルデザインスクール株式会社/神奈川県・大阪府・静岡県・千葉県)

ジュニアビレッジとは、小中学生が主役の擬似会社です。現在、全国6ヵ所で、学校も年齢も異なるこどもたちが毎週末集まり、地域の大人や大学生たちと一緒に、食や農に関する地域のリアルな課題解決に挑戦しています。地域の資源を微生物の力で分解し堆肥をつくることからはじめ、農作物を育て、地域の農家さんからも規格外野菜も購入し、食品ロス削減につながる特産品を開発し、販売した売上を翌年の会社経営資金にしています。活動で取り組むチャレンジは全部で3つです。

チャレンジ①耕作放棄地・遊休地を復元し、自分たちで作物を育て、畑を管理できるか？

チャレンジ②自分たちで特産品を開発し、適正価格で販売できるか？

チャレンジ③自分たちで会社を経営できるか？

年間活動を通じて、こどもたちは人と、環境・社会・経済の相互の関係性、多様性を知り、試行錯誤の体験を重ねています。



こどもまんなかアクションの事例⑧

体験型等こどもの育ち応援(1)

0歳から親子で始める！体験型食育 ベビーキッチン

(五感で学ぶ料理教室ククラボ／京都府京都市)

『五感で学ぶ料理教室ククラボ』は、こどもたちの笑顔と自立のために、料理を通して「食べること」＝「生きること」を伝えています。

0歳から始める体験型食育では、お子様を通して保護者の食の意識を変えてもらう…というのがねらいです。野菜を比べたり、ひとつの食材からいろいろな食品が出来る変化を見たり、行事食の由来を学んだり、乳幼児に語り掛けるように保護者が食を学びます。

更に、大人の食事から離乳食を取り分ける方法や、簡単なだしの取り方など、普段の食事を見直すきっかけにもしています。悩み相談を聴きあったり、親同士のコミュニティの場になっています。



こども参観日 (フィード・ワン株式会社／神奈川県横浜市)

フィード・ワンでは、会社と家庭のコミュニケーションの場を創出することにより、仕事と子育てを両立できる環境づくりを推進しています。その取組の一つとして、2016年より従業員のこども達を職場へ招く「こども参観日」を開催しています。「こども参観日」では、事務所や飼料工場の見学や、飼料がどのように利用されているのかわかる勉強会、フィード・ワンの飼料で育った食材を使った調理実習などを行っています。また、こども達に「働くこと」を身近に感じてもらえるよう、一日社員として社員証や名刺を授与し、従業員との名刺交換やお仕事インタビューを行っています。

参加したこども達はもちろん、その親である従業員からも「仕事についてこども達が理解する良い機会になった」と好評をいただいている取組です。



こどもまんなかアクションの事例⑨

体験型等こどもの育ち応援(2)

赤ちゃん先生プロジェクト（NPO法人ママの働き方応援隊／全国）

女性が出産後も「働く」を通じて社会と繋がっていける「場」を創り続けることをミッションに掲げて活動を展開しておりますが、その中の大きな柱の1つに「赤ちゃん先生プロジェクト」があります。

0-3歳の赤ちゃんとその母親がペアになり、教育機関や高齢者施設を訪問し、実際に赤ちゃんとのふれあいを通して「命の大切さ」や「癒し」を感じてもらうという内容です。赤ちゃんが持つ力によって、その場にいる人が笑顔になり、赤ちゃんから沢山のことを感じてもらうプログラムとなっております。2010年兵庫から全国に広がり、累計8000回近く開催されています。

赤ちゃん先生クラスを開催していくことが各世代の問題を解決する大きなきっかけになるのではないかと考えています（少子化、孤育、いじめ、自殺、自己肯定感の低下、望まない妊娠、孤独死、高齢者の孤立）。



海洋プラスチックゴミ問題を学ぶプラ干狩り体験

（アビスパ福岡株式会社／福岡県福岡市）

アビスパ福岡では、今年からスタートした社会連携プロジェクト『FUKUOKA TAKE ACTION!』の活動の一環で、ホームゲーム開催日のベスト電器スタジアムのイベント広場にて、環境問題へのアクションを目的とした「SDGsブース」を設置し、こどもたちにイベント体験を通して楽しみながら海洋問題やプラスチックゴミ問題を学ぶ機会を作りました。

6月に福岡の海岸で実施したビーチクリーン活動でこどもたちが選手と一緒に回収した「海洋プラスチックごみ（マイクロプラスチックなど）」を活用し、ブース内に用意した簡易砂浜で来場したこどもたちにマイクロプラスチックの回収体験をしてもらいました。また、海洋問題についての学びを目的とした展示ブースや、実際に回収したプラスチックごみを使ってごみに関心を持ってもらう事も目的とした「アート体験ワークショップ」も開催しました。これまでも森林、海での清掃活動やワークショップを実施してきましたが、今後も継続した取り組みとしてこどもたちへの体験機会を創出致します。



こどもまんなかアクションの事例 ⑩ 共働き・子育て

働き方改革／妊娠・育児と仕事の両立支援（伊藤忠商事／東京都港区）

【朝型勤務】2013年に20時以降の残業を原則禁止し、仕事が残っている場合には翌朝8時前に始業する「朝型勤務」を導入。早く帰宅し、翌朝効率的に仕事をする文化が定着しました。2022年に「朝型フレックスタイム制度」を導入。週2回までの在宅勤務・15時以降の早帰りを可とし、「フルタイム勤務と家庭の両立」支援を強化しています。

【健康経営】2017年「がんと仕事の両立支援」を導入。国立がん研究センターと提携し、最先端の予防・治療・職場の支援体制整備の他、万一の場合の子女育英資金を設けています。

【両立支援】2010年から事業所内託児所「I-Kids」を設置しています。2022年度には育児両立手当・妊活特別支援休暇を新設。不妊治療のクーポン提供・社外専門家への相談窓口を設置する等、新しい施策にも取り組んでいます。



男性育休取得推奨企業を対象とした「育休」と向き合うプレママ・プレパパレッスン （コンビ株式会社／全国）

第一子を迎える方の出産準備をサポートするため、定期開催しているコンビ「プレママ・プレパパレッスン」。共働きをする方、男性育休取得を推進する企業様からのご要望にお応えし「育休と向き合うプレママ・プレパパレッスン」を始めました。

育休取得経験者からのアンケートを元に、育休取得時期や育休中の過ごし方などについて、具体的な体験談をご紹介します。また、新生児と同じ重さ・大きさの赤ちゃん人形を抱っこしたり、「沐浴」「お着替え・おむつ替え」「つめ切り」「妊婦ジャケット」「ベビーグッズコーナー」「ベビーカーの走行・操作」「チャイルドシート乗せおろし」など育児を体験できるコーナーもご用意しています。



こどもまんなかアクションの事例 ⑪

こどもまんなか応援サポーターとの連携 (1)

ファミマこども食堂

こどもまんなか応援サポーターに参加いただいているファミリーマートは、こどもたちといっしょに食事をするだけでなく、いろいろな体験や世代間交流ができる「ファミマこども食堂」を、各地域の店舗で様々なスタイルで開催しています。そして令和5（2023）年11月、こども家庭庁がファミリーマートの協力を得て、「ファミマこども食堂」で、こども基本法を楽しく説明するコラボレーションを行いました。

会場のファミリーマート板橋ハッピーロード大山店には、こどもたちと保護者、ファミリーマートの担当者、こども家庭庁の職員が集まり、こどもたちは最初にファミリーマートのお仕事を体験。そしてお店が用意してくれた食事をおいしくいただいた後、こども基本法を〇×クイズ形式で楽しく学んでももらいました。こどもたちと保護者から「こども基本法」そして「こどもまんなか」を身近に感じたなど、リアルな感想をうかがうことができました。



のくにラボ～わたしたちのウェルビーイング、みーつけた！

宮崎県の都城市立図書館にて、都城商業高等学校の共創ウェルビーイング部（通称：のくにチーム）が主催する「のくにラボ～わたしたちのウェルビーイング、みーつけた！～」と題したワークショップが開催されました。

第一部では、《まちのウェルビーイングな居場所ってどんな場所？》をテーマに、NTTコミュニケーション科学基礎研究所の渡邊氏、都城商業高校の北郷先生、こども家庭庁職員によるトークセッションが行われました。

そして第二部では、《あなたにとって大事なものが何？》と題して、ご来場の市民のみなさんも一緒にグループワークが行われました。「信頼」「成長」「決まりを守る」など大事にしたい要素が記されたカードから、「あなたがこのまちで大事にしたいこと」「みんなで決めた大事にしたいこと」を選び、理由とともに発表されました。それぞれの意見がグラフィックレコーディングで、あっという間にイラストで記されたことにより、記憶に残るワークショップとなりました。



こどもまんなかアクションの事例⑫

こどもまんなか応援サポーターとの連携 (2)

こどもの城合唱団「大臣室体験と歌とパフォーマンス披露」

こども家庭庁の取組をより多くの方に知っていただくきっかけとして夏休みに実施した大臣室解放イベントに、障害の有無にかかわらず一緒に活動する「こどもの城合唱団」のこどもたち約40名が参加してくれました。

「こどもまんなか大臣になってみよう!」をテーマに、こども家庭庁職員の案内で大臣室に行き、大臣席に座っての写真撮影や、黒板に「大臣になったらやってみたいこと」を書くなどを楽しみました。

そして、こどもの城合唱団のメンバーからは、「みんなハッピー」をテーマに歌とパフォーマンスを披露いただきました。



ユースのアクションサミット

全国で広がりを見せている「こどもまんなか応援サポーター」の中から、とくに若者世代（ユース）が主体的に活動している団体にスポットを当て、同世代が交流する「ユースのアクションサミット」をこども家庭庁で開催しました。若者主体で活動している、東北公益文科大学 Liga（山形）、ジュニアビレッジ（神奈川、静岡）、フリースクールキリンのとびら（大阪）、manabo-de（岡山）、うみのこてらす（徳島）、都城商業高等学校のくにプロジェクト（宮崎）の6団体が参加しました。

第一部は、各団体が地域でどのような活動をして、どのようなことを感じているのかを紹介しました。それぞれが感じる課題に対して、前向きに楽しく取り組んでいる様子がわかり、会場からは大きな拍手がおくられました。

第二部は、「わたしたちと地域のウェルビーイングを考えよう」をテーマに、グループに分かれてワークショップを行いました。参加者からは「否定しないというルールが最初にあった良かった」「感じ方がみんなそれぞれで、人の意見を受容することの大切さを感じた」「自分たちと同じように考えて活動している同世代がいっぱいいるということがわかって励みになった。がんばろうって思った」などという感想がきかれました。

